

しょうがい者への偏見意識に他者ならびに自己の受容感が与える影響

小正 浩徳^{1,2}, 武田 俊信^{1,2}

¹龍谷大学心理学部

²龍谷大学犯罪学研究センター

Exploring the Influence of Acceptance of Others and Self on Prejudice Against Individuals with Disabilities

Komasa Hironori^{1,2}, Takeda Toshinobu^{1,2}

¹ Faculty of Psychology, Ryukoku University

² Criminology Research Center, Ryukoku University

要旨

本研究では、人々が感じている「他者受容」、「自己受容」、「他者からの受容」が、人々の持つ偏見の低減に影響を与えるかどうかを明らかにするために、日本全国に居住する20代から70代までの男性300名女性300名計600名を対象に、オンラインによるアンケート調査を行った。重回帰分析ならびに偏相関分析を用いた結果、人々が持つしょうがい者への象徴的偏見のうち、「しょうがい者の過少評価」には「自己に対する劣等感・不信感」が正の影響を与え、「他者からの受容・信頼感」は負の影響を与えていることが分かった。また、「しょうがい者への理解の無さ」には「他者からの受容・信頼感」が負の影響を与え、「他者に対する非受容性」は正の影響を与えていることが分かった。

これらの結果から、偏見に関する人権教育を行うにあたり、「自分への劣等感・不信感」、「他者からの受容・信頼感」、「他者に対する非受容性」にも着目した取り組みを考える有用性が示唆された。

This study investigated the impact of “individuals’ perceived acceptance of others,” “self-acceptance,” and “sense of acceptance from others” on disability prejudice. An online survey was conducted on 600 respondents (300 men and 300 women) aged 20–70 years old and residing in Japan. Through multiple regression analysis and partial correlation analysis, we found that “feeling of inferiority and distrust toward oneself” had a positive influence on “undervaluation of individuals with disabilities,” while “feeling of acceptance and trust from others” negatively impacted

individuals' prejudice against individuals with disabilities. Additionally, "feeling of acceptance and trust from others" had a negative influence on "lack of understanding on individuals with disabilities," while "nonacceptance toward others" had a positive impact.

Results suggest that highlighting "feelings of inferiority and distrust toward oneself," "feelings of acceptance and trust from others," and "nonacceptance toward others" is necessary to provide adequate human rights education on prejudice.

キーワード：象徴的偏見，自己受容，他者受容，他者からの受容感

Keywords: Symbolic prejudice, Self-acceptance, Acceptance of others, Acceptance by others

緒言

本論文は、偏見や差別、stigma の解消に向け臨床心理学の立場からの人権教育のあり方を構築することを目指し、他者ならびに自己の受容と偏見や差別、stigma との関係を探ろうとするものである。

国民が人権問題の解決に向けて国に力をいれてほしいと望む事柄について内閣府（2022）が調査したところ、最も割合が高いのは「学校内外の人権教育を充実する」（57.6%）、次いで「人権意識を高め、人権への理解を深めてもらうための啓発広報活動を推進する」（46.9%）、「人権が侵害された被害者の救済・支援を充実する」（44.2%）であったという。この数字が示すように、人権問題の解決には人権教育を充実させることが必要であると人々は考えているようである。

人権教育について我が国の「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」第2条では、「人権尊重の精神の涵養を目的とする教育活動」と定めている。これをふまえて文部科学省（2008）は人権教育の目的について、人権や人権擁護に関する知的理解と人権感覚を基盤として、自分と他者との人権擁護を実践しようとする意識、意欲や態度を向上させること、そしてその意欲や態度を実際の行為に結びつける実践力や行動力を育成することが求められる、と述べている。さらに「人権教育を通じて育てたい資質・能力」として「偏見や差別を見きわめる技能、その他相違を認めて受容できるための諸技能」としている。

このように、国として人権教育において偏見や差別を見極め、自他の相違を認め受容する力を育もうとしており、同時に多くの人々は偏見や差別といったことは決して望ましくないことを知っているはずである。しかし、偏見や差別はなかなか無くならないことやその難しさも周知の事実であろう。このことは、先述の内閣府の調査の結果からもうかがい知ることができる。つまりは、偏見や差別が自然に発生し、維持され、社会のさまざまな場面でその片鱗を見ることができるといえよう（大江、2018）。

こうした偏見や差別に対する心理学的研究では、人々は差別に対して意識レベルでは平等主義的であろうとしているものの、無意識のレベルでは差別感情や差別意識を抱いているという異なる可能性についての指摘がなされ、この無意識レベルつまりは人間の深層の偏見や差別に関する研究がなされ

るようになってきている（池上、2014）。

無意識レベルつまりは私たち自身が気づいていないレベルの偏見や差別について、近年では例えば「microaggressions（マイクロアグレッション）」や「象徴的レイシズム（偏見）」等として注目されている（Sue,D.W.、2010）。

このような偏見や差別を長期的かつ段階的に低減、解消しようという接触仮説や拡張接触仮説、仮想接触仮説やさらには個人の置かれている情報環境を変えることで潜在的態度を変容させようとする研究が注目されている（池上、2014；浅井、2018）。

これらの研究は、私たちが知識を得る過程に対するアプローチとも考えられる。アプローチからの研究として教育的観点からのものがあり、たとえば Ojio,Y. ら（2019）は精神疾患の生物医学的知識に関する教育を一般の人々向けに行った結果、精神疾患に対する stigma は軽減することを明らかにした。一方で、鳥居ら（2021）は高校生に対して、マンガと当事者からの発言などを用いたオンライン授業を行った結果、知識からというよりも共感的な理解から障害に対する受容的行動が進み、stigma の軽減がみられたことを示唆している。

内閣府（2019）は障害に対する偏見や差別を超えた共生社会を目指すために「心のバリアフリー」を掲げ、「自分とは異なる条件を持つ多様な他者とコミュニケーションを取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと」をポイントの一つにしている。鳥居ら（2021）の示唆は、このポイントからの偏見や差別意識の低減の可能性を示しているともいえる。つまり、他者に対する共感的理解がなされること、ひいては他者を受容する心を育てる教育も偏見や差別解消に向けた取り組みになりうると考える。

そこで、本研究では、他者を受容する心を育てることからの障害への偏見や差別解消を目指す人権教育を考えることを目標に、「受容」と「偏見」との関係を探るものとする。

ここでいう「受容」とは、ありのままの自分を受け入れることができているという「自己受容」と、他者から受け入れられているという感覚を指す「他者からの受容」、そして他者を受け入れることができるという「他者受容」の3点に分けることができる。

小正ら（2021）は、対人支援職を希望する学生に向けた死生観教育において、自分の意見も相手の意見もその違いを含めて大事にするという前提のもと死にまつわるディスカッションを実施した結果、その多様性と支援対象者への理解・共感をふまえた関わり大切さを学生が自ら見いだしていた。熊田ら（2019）は、自尊感情の回復が自己の肯定的承認につながり、他者受容へつながる可能性を示唆している。また、高井（2001）は、異文化社会への適応にあたり異質性の受容には自己の充実し成長していることが必要という上田・河野（1993）の指摘をもとに、ありのままの自己を他者から受け入れられた経験が、異質性を受け入れられることのできる寛容性につながる可能性を示唆している。

これらから、自己が「他者から受け入れられること」で「自分自身を受け入れられる」ことになりそして「他者を理解し受容しようとする」というつながりが生じていると考えられる。

このように「他者受容」の心を育てることで、偏見や差別、stigma の解消につながると思われる。そして「他者受容」の心を育てるには、「自己受容」の心を育てることが関わっており、「自己受容」

の心を育てるには「他者からの受容」が関わっている。そこで、偏見や差別、stigmaの解消に向け臨床心理学の立場からの人権教育には、「他者受容」、「自己受容」、「他者からの受容」という「受容」の心を育てるための教育が必要であると考ええる。

そこで、本研究では「他者受容」、「自己受容」、「他者からの受容」が偏見や差別、stigmaの低減に影響を与えるという仮説をたて、人々の「他者受容」、「自己受容」、「他者からの受容」と偏見や差別、stigmaとの関係を調査することとする。

ここで語の整理をしておく。「偏見」とは対象に対する否定的態度を指し、「差別」は特定の集団やその構成員に対して公平さを欠く不当な扱いをすることを指す(池上、2014)。stigmaはGoffman(1963)により示された、「偏見」や「差別」の意味を含み、対象となる者に対してその信頼や面目を失わせるような働きを指す語である。

本調査では、このうち人々の持つ無意識レベルの「偏見」に焦点をあてる。これはここまで述べてきた通り、私たちはすでに偏見や差別はいけないことであることを十分に認識しているつまりは意識レベルではいけないことと認識していることから、無意識レベルの態度に着目しようとするためである。そこで、(清水ら、2022)が作成した「ある対象に対して、すでに偏見や差別の問題は解決しており、彼らが不平を訴えることは不当で、正当化されるべきではないといった態度」という「象徴的偏見」の程度を測定する「象徴的障害者偏見尺度日本語版」を用いる。

「受容」に関して、高井(2001)が作成した「存在受容感尺度」と吉田ら(1992)が作成したものを上村(2007)が再検討し作成した「自己・他者受容感尺度」を用いる。なお、「存在受容感尺度」の人を超越した者からの受容感を測定する「超越力を意識」因子は調査から除外した。本調査では自己と他者という人と人の関係に着目したためである。

方法

1) 調査方法

調査時期は2022年12月である。調査は、株式会社クロス・マーケティングを介してオンラインでのアンケート調査(内容は、「3) 調査用紙」に記載する)を実施した。調査協力者は日本全国に居住する者である。調査にあたってフェイスシートにて、回答は任意であること、個人情報保護などの倫理的配慮、また龍谷大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」(申請番号2022-19、2022年8月5日承諾)の審査を受け、承認を得ていることを明記した文章を読んでもらったうえで、調査への同意と協力を確認した。

2) 分析対象者

分析対象者は、調査への同意と協力を得られた国内に居住する600名である。内訳は20代から70代まで且ついずれの年代群も男女50名ずつである。

3) 調査用紙

①フェイスシート

調査への協力依頼ならびに倫理的配慮に関する文章と、調査への同意と協力を示すチェック欄（はい・いいえの2択式）で構成されている。

②デモグラフィック項目

しょうがい者の経験について「あなたは精神的なまたは身体的な（もしくは両方に）何らかの障害を抱えていますか？」という質問により、「はい」「抱えたことはない」「過去に抱えたことがある」「回答は控える」の4択にて確認した。なお、質問文内で「障害」と漢字表記したのは、医療における診断に用いられている表記に合わせたためである。加えて、性別、年齢、居住地域、職業、年収に関する質問で構成されている。

③他者ならびに自己に関わる受容感の測定

次に示す2つの尺度を用いた。1つ目は、高井（2001）による存在受容感尺度である。この尺度は4因子で構成されているが、本研究の意図とは異なると考えられた「超越力を意識」（質問例：私は何か大きな力（神様、仏様、大自然など）によって生かされているのだと思う）を除いた16項目を用いた。この尺度は高井（2001）にならい「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」の5件法で測定している。2つ目は上村（2007）による自己・他者受容尺度である。この尺度は、「自己受容尺度」15項目と「他者受容尺度」13項目の二つの尺度で構成されている。この両尺度の質問のうち因子負荷量が|.50|より高い14項目を用いた。この尺度は上村（2007）にならい「1. 全くあてはまらない」から「7. よくあてはまる」の7件法で測定している。

④自己評価の測定

自己評価の測定のために、原田（2015）による短縮版自己評価尺度12項目を用いた。「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」の5件法で測定した。なお、本論文の目的は「他者ならびに自己への受容感」と「しょうがい者への偏見意識」との関係の調査であるため、結果分析には用いていない。

⑤しょうがい者への偏見の測定

しょうがい者への偏見の測定のために清水ら（2022）による象徴的障害者偏見尺度日本語版11項目のうちから因子負荷量が|.50|より高い8項目を用いた。この尺度は清水ら（2022）にならい「1. 強く反対する」から「7. 強く賛成する」の7件法で測定している。

表 1 存在受容感尺度 因子分析結果

因子名	質問文	I	II	III	平均	SD
他者からの受容・信頼感 平均=3.66 SD=1.099 $\alpha = .967$	私には私を理解してくれる人がある。	.961	-.061	.036	3.71	1.172
	私には心から信頼し合える人がある。	.916	.002	-.021	3.61	1.219
	私には私をあたかく見守ってくれる人がある。	.911	-.070	.101	3.78	1.129
	私には私がつらいときや悲しいときに慰めてくれる人がある。	.908	-.016	.026	3.62	1.180
	私には私の個人的問題について話し合える人がある。	.896	.048	-.026	3.57	1.208
	私には家族や他人を問わず、ありのままの自分を受け入れてくれる人がある。	.873	-.066	.031	3.68	1.211
孤独感・疎外感 平均=2.21 SD=0.958 $\alpha = .913$	私は人から拒否されることが多いと感じている。	-.120	.889	.027	2.21	1.112
	私は無視されることが多いと感じている。	-.175	.844	.056	2.15	1.082
	私は孤独でさびしいと感じている。	-.105	.811	-.007	2.26	1.145
	私は誰からも愛されたことがないと感じている。	.032	.748	.093	2.07	1.123
	私の周囲には心を許し合える人がほとんどいない。	.309	.709	-.135	2.36	1.256
	私には私の話を真剣に聞いてくれる人はいない。	.346	.660	-.086	2.18	1.162
感謝・やすらぎ 平均=3.65 SD=0.889 $\alpha = .900$	私は、いろいろな人のおかげで今日までやってこれたのだ、と感謝している。	-.061	-.037	.967	3.76	1.025
	私は日常生活のささやかなことにでも感謝の思いがある。	.057	-.060	.765	3.55	0.974
	今までの人生において人にあたたく包まれている安らぎや喜びを感じたことがある。	.181	.097	.671	3.75	1.048
	周囲の人たちはあたたい心で私に接してくれているように感じている。	.152	.155	.628	3.56	1.001
因子相関行列		I	II	III		
I		-	.580	.663		
II			-	.498		
III				-		

結果

統計分析には、IBM SPSS Statics Ver.29.000（Windows 版）を用いた。

分析を行うにあたり、存在受容感尺度、自己・他者受容尺度、象徴的障害者偏見尺度日本語版の3つの質問紙について最尤法、promax 回転による因子分析を行った。因子を決定するにあたり、因子負荷量が |.50| 以上を基準とした。なお、すでに各先行研究にて検証されているこの3つの質問紙について因子分析を行ったのは、質問項目を抜粋して用いたことで因子構造に変化がないかを再確認するためである。

1) 因子分析結果

① 存在受容感尺度の因子分析結果

存在受容感尺度の因子分析結果ならびに平均と標準偏差、信頼性係数を表1に示す。表1に示すとおり、高井（2001）と同様に3因子構造であることが確認された。

第1因子は「私には私を理解してくれる人がある」「私には心から信頼し合える人がある」などの6つの質問で構成されていることから「他者からの受容・信頼感」と命名した。この因子は、得点が5に近づくほど「他者からの受容・信頼感」を得ていると回答者は感じていると考えられる。

第2因子は「私は人から拒否されることが多いと感じている」「私は孤独でさびしいと感じている」などの6つの質問で構成されていることから「孤独感・疎外感」と命名した。この因子は、得点が5に近づくほど、「孤独感・疎外感」を回答者は強く感じていると考えられる。

第3因子は「私は、いろいろな人のおかげで今日までやってこれたのだ、と感謝している」「今までの人生において人にあたたく包まれている安らぎや喜びを感じたことがある」などの4つの質問で構成されていることから「感謝・やすらぎ」と命名した。この因子は、得点が5に近づくほど、「感謝・やすらぎ」を回答者は強く感じていると考えられる。

表2 自己・他者受容尺度 因子分析結果

因子名	質問文	I	II	III	平均	SD
アサーティブ感 平均=4.22 SD=1.008 $\alpha=.818$	人に対していろいろな感情と衝動をもっているけれど、それをごく自然なものとして認められる。	.783	-.024	.032	4.31	1.281
	親しい他人に自分のしたことや考え方を批判されても、無視せずその人の意見をよく聞き理解しようとする。	.768	.165	-.135	4.34	1.237
	人の物の見方が自分と違ってても、頭から拒否せずその人の考え方を尊重する。	.724	.162	-.132	4.39	1.237
	たとえほかの人が自分を疑っているときでも、人間として自分の価値を疑わない。	.621	-.155	.135	4.07	1.356
	将来何か問題が起こったとしても、何とか対処していけるという自信がある。	.530	-.347	.150	3.99	1.525
自己に対する劣等感・不信感 平均=3.11 SD=1.414 $\alpha=.887$	どんな時でもどんな人といても、なんだか自分自身について半信半疑である。	-.007	.913	.021	2.99	1.511
	誰といてもどんな時にも、よく劣等感に悩まされる。	-.015	.862	.063	3.04	1.603
	大勢の人たちの中では間違ったことを言うのをおそれるので、たいていあまり話さない。	.053	.694	.114	3.30	1.585
他者に対する非受容性 平均=3.13 SD=0.950 $\alpha=.769$	親しい他人に自分の意見を批判されると、その人の意見には耳もかさず自分の意見ばかり押し通す。	-.028	-.022	.700	2.97	1.185
	他人があとで何か良いことをしてくれるのでなければ、他人のために何かすることにはあまり利点があるとは思わない。	.011	.084	.653	3.21	1.267
	自分に対して何か批判があったり誰かが何かを言ったりすると、それを受け容れることができない。	.053	.134	.610	3.41	1.213
	親の考え方は気に入らないので、一方的に非難したり反発したりする。	-.051	.041	.595	2.91	1.275
	因子相関行列	I	II	III		
	I	—	-.231	-.176		
	II		—	.477		
	III			—		

表3 象徴的障害者偏見尺度 因子分析結果

因子名	質問文	I	II	平均	SD
しょうがい者への過少評価 平均=2.82 SD=1.201 $\alpha=.921$	障害者は、意欲的であってもたいてい成功しない。	.954	.004	2.73	1.264
	障害者は一生懸命努力しても、目標をたいてい達成できない。	.898	.009	2.77	1.287
	一生懸命努力しても、障害者の成功はほとんど保証されない。	.791	.046	2.95	1.328
しょうがい者への理解の無さ 平均=3.17 SD=1.076 $\alpha=.794$	障害者は彼らの社会での状況に不平を言い過ぎである。	-.112	.972	3.25	1.248
	障害者は社会に対して多くのことを求めすぎている。	.157	.653	3.31	1.248
	成功していない障害者は社会システムを責めるべきではない。彼らが本当に責めることができるのは自分自身だけだ。	.129	.543	2.95	1.341
	因子相関行列	I	II		
	I	—	.586		
	II		—		

② 自己・他者受容尺度の因子分析結果

上村（2007）では、主成分分析を行っていた。ここでは、自己受容と他者受容が因子として分けて見られることになるのかを再度確かめることもかねて、一括して因子分析を行った。その結果ならびに平均と標準偏差、信頼性係数を表2に示す。表2に示すとおり、3因子構造であることが確認された。上村（2007）では自己受容、他者受容の2因子であったので、本研究では異なる結果となっている。

第1因子は「人に対していろいろな感情と衝動をもっているけれど、それをごく自然なものとして認められる」、「親しい他人に自分のしたことや考え方を批判されても、無視せずその人の意見をよく聞き理解しようとする」などの5つの質問で構成されていることから「アサーティブ感」と命名した。この因子は得点が7に近づくほど、回答者の「アサーティブ感」が強くなると考えられる。

第2因子は「誰といてもどんな時にも、よく劣等感に悩まされる」「どんな時でもどんな人といても、なんだか自分自身について半信半疑である」などの3つ質問で構成されていることから、「自己に対する劣等感・不信感」と命名した。この因子は得点が7に近づくほど、「自己に対する劣等感・不信感」を回答者は強く感じていると考えられる。

第3因子は「親しい他人に自分の意見を批判されると、その人の意見には耳もかさず自分の意見ばかり押し通す」、「自分に対して何か批判があったり誰かが何かを言ったりすると、それを受け容れることができない」などの4つの質問で構成されていることから「他者に対する非受容性」と命名した。この因子は得点が7に近づくほど、回答者の「他者に対する非受容性」は強くなると考えられる。

表 4 相関分析表

	他者からの受 容・信頼感	孤独感・疎外感	感謝・やすらぎ	自己に対する劣 等感・不信感	アサーティブ感	他者に対する非 受容性	しょうがい者へ の過少評価	しょうがい者へ の理解の無さ
他者からの受容・信頼感	—	-.569**	.690**	-.330**	.314**	-.262**	-.291**	-.286**
孤独感・疎外感		—	-.523**	.562**	-.298**	.452**	.315**	.279**
感謝・やすらぎ			—	-.340**	.394**	-.292**	-.284**	-.267**
自己に対する劣等感・不信感				—	-.245**	.494**	.335**	.260**
アサーティブ感					—	-.171**	-.156**	-.137**
他者に対する非受容性						—	.273**	.277**
しょうがい者への過少評価							—	.564**
しょうがい者への理解の無さ								—

** 1%有意 (両側)

表 5 重回帰分析結果

目的変数	説明変数			F	R ²
	他者からの受容・信頼感	自己に対する劣等感・不信感	他者に対する非受容性		
しょうがい者への過少評価	-.189 ***	.215 ***	.117 **	37.630 ***	.159
しょうがい者への理解の無さ	-.206 ***	.109 *	.169 ***	30.970 ***	.130

説明変数の数値は標準偏回帰係数である

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

③ 象徴的障害者偏見尺度日本語版の因子分析結果

象徴的障害者偏見尺度日本語版の因子分析結果ならびに平均と標準偏差、信頼性係数を表 3 に示す。表 3 に示すとおり、2 因子構造であることが確認された。

第 1 因子は「障害者は、意欲的であってもたいてい成功しない」、「障害者は一生懸命努力しても、目標をたいてい達成できない」などの 3 つの質問で構成されていることから「しょうがい者への過少評価」と命名した。この因子は得点が 7 に近づくほど、回答者は「しょうがい者への過少評価」する傾向にあると考えられる。

第 2 因子は「障害者は彼らの社会での状況に不平を言い過ぎである」、「障害者は社会に対して多くのことを求めすぎている」などの 3 つの質問で構成されていることから「しょうがい者への理解の無さ」と命名した。この因子は得点が 7 に近づくほど、回答者の「しょうがい者への理解の無さ」を示していると考えられる。

2) 他者ならびに自己への受容感としょうがい者への偏見意識の関係性

存在受容感尺度、自己・他者受容尺度の 6 因子と象徴的障害者偏見尺度日本語版の 2 因子の pearson の相関係数を求めた (表 4)。

この結果から、「しょうがい者への過少評価」と「しょうがい者への理解の無さ」をそれぞれ目的変数にし、存在受容感尺度、自己・他者受容尺度の 6 因子を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った (表 5)。

「しょうがい者への過少評価」を目的変数とした重回帰分析の結果、回帰性は有意 ($p < .001$) であり、調整済み R² 乗は .159 であった。そして、「しょうがい者への過少評価」には「自己に対する劣等感・不信感」が弱い正の影響を、「他者からの受容・信頼感」は非常に弱い負の影響、「他者に対する非受容性」は非常に弱い正の影響を与えていた。

表6 「しょうがい者への過少評価」に関する偏相関分析

		他者への非受容性	他者からの受容・信頼感
しょうがい者への過少評価	相関係数	.131 **	-.203 ***
	自由度	597	597
		*** p < .001 ** p < .01	

表7 「しょうがい者への理解の無さ」に関する偏相関分析

		他者への非受容性	自己に対する劣等感・不信感
しょうがい者へ理解の無さ	相関係数	.218 ***	.184 ***
	自由度	597	597
		*** p < .001	

「しょうがい者への理解の無さ」を目的変数とした重回帰分析の結果、回帰性は有意 ($p < .001$) であり、調整済み R^2 乗は.130であった。そして、「しょうがい者への理解の無さ」では「他者からの受容・信頼感」が弱い負の影響を、「自己に対する劣等感・不信感」「他者に対する非受容性」が非常に弱いながらも正の影響を与えていた。

この重回帰分析の結果を踏まえて、非常に弱い影響を与えているとされた2因子をさらに検討するために①「自己に対する劣等感・不信感」を制御変数として、「しょうがい者への過少評価」と「自己に対する劣等感・不信感」、「他者に対する非受容性」の偏相関分析、②「他者からの受容・信頼感」を制御変数として、「しょうがい者への理解の無さ」と「自己に対する劣等感・不信感」、「他者に対する非受容性」の偏相関分析をそれぞれ行った。

①の結果を表6に示す。ここでは「しょうがい者への過少評価」と「他者からの受容・信頼感」で弱い負の相関（相関係数-.203、 $p < .001$ ）が見られた。一方で、「他者への非受容性」との間では、ほぼ相関は見られなかった。

②の結果を表7に示す。ここでは、「しょうがい者への理解の無さ」と「他者への非受容性」で弱い正の相関（相関係数.218、 $p < .001$ ）が見られた。一方で、「自己に対する劣等感・不信感」との間ではほぼ相関は見られなかった。

考察

本調査研究は、他者ならびに自己への受容感がしょうがい者への差別意識に与える影響を探ることを目的としている。今回、日本全国に居住する20代から70代までの男女計600名にオンラインによるアンケート調査を行った結果を用いて、しょうがい者への偏見意識他者ならびに自己への受容感が与える影響について、検討を行う。

1) 「しょうがい者への過少評価」と他者ならびに自己への受容感について

「しょうがい者への過少評価」する意識には、「自己に対する劣等感・不信感」が弱い影響を与えていることが分かった。ただし調整済み R^2 乗の数値が.159であり、この結果については慎重に検討

する必要があることも分かった。そこで、「自己に対する劣等感・不信感」を制御変数として「しょうがい者への過少評価」と、「他者からの受容・信頼感」、「他者に対する非受容性」の間で偏相関分析を行ったところ、「他者からの受容・信頼感」において有意な弱い負の相関が見られた。これらのことから、「自己に対する劣等感・不信感」が高まることが、「しょうがい者への過少評価」につながる一因になっていると考えられる。そして、「しょうがい者への過少評価」の大小には「他者からの受容・信頼感」も影響を与えていることが考えられた。

2) 「しょうがい者への理解の無さ」と他者ならびに自己への受容感について

「しょうがい者への理解の無さ」には、「他者からの受容・信頼感」が弱い正の影響を与えていることが分かった。しかしながら、調整済み R² 乗の数値が .130であり、この結果については慎重に検討する必要があることも分かった。そこで、「他者からの受容・信頼感」を制御変数として「しょうがい者への理解の無さ」と「自己に対する劣等感・不信感」、「他者に対する非受容性」の間で偏相関分析を行ったところ、「他者に対する非受容性」でのみ有意な弱い正の相関が見られた。これらのことから、「他者からの受容・信頼感」を得られていると感じることが「しょうがい者への理解の無さ」を弱める一因になると考えられる。そして「しょうがい者への理解の無さ」の大小には「他者に対する非受容性」も影響を与えていることが考えられた。

3) しょうがい者への偏見意識に他者ならびに自己への受容感が与える影響について

今回用いた清水ら（2022）による象徴的障害者偏見尺度日本語版は、対象となる人々（障害者）に対する偏見や差別の問題は解決していて、その人々が不平を訴えることは不当であり、正当化されるべきではないという態度について測定する質問紙であった。これは「人間の成功は、各自が一生懸命努力するか否かに左右すると考える」程度を測る項目である「個人主義（本研究では「しょうがい者への過少評価」と命名）」と、「差別はもはや存在していないと感じる程度」、「障害者に対する哀れみや温情のなさの程度」、「障害者は福祉サービスに対して必要以上の要求をしていると考える程度」をまとめた項目である「現状の理解のなさ（本研究では「しょうがい者への理解の無さ」と命名）」の2因子構造で成り立っている。

清水ら（2022）によれば「個人主義」傾向が強くなる（本研究での「しょうがい者への過少評価」得点が低くなる）と、しょうがい者の困窮の原因をしょうがい者自身の努力の欠如にあるとして、その困窮への手助けを行わない可能性を指摘している。つまり、「しょうがい者への過少評価」を行わない代わりに、しょうがい者も健常者と同様に見るという平等の意識が働いているのである。これはしょうがい者の障害特性を考慮しないということにつながる。また、「現状の理解のなさ」が強くなる（本研究での「しょうがい者への理解の無さ」の得点が高くなる）ことについて清水ら（2022）は障害者の能力を低く評定している可能性を指摘している。ここには「障害者差別は既に改善されているのだから未だに不平を訴えている多くの障害者は、差別とは一切関係のない原因によって低地位にあるのだ」という認識を持っていると考えられるという。ここからさらに、本研究での結果を踏まえ

て考えてみたい。

「しょうがい者への過少評価」には「自己に対する劣等感・不信感」が弱い正の影響を与えていることが分かった。つまり、「自己に対する劣等感・不信感」が強い人は、より「しょうがい者を過少評価」ししょうがい者の能力を低く見積もるということにつながる。これは、自分自身と周囲との関係をネガティブに捉えて、結果他集団に対する差別意識が働いている（池上、2014）として考えられる。一方で、「自己に対する劣等感・不信感」が低い人は、「しょうがい者を過少評価」せずしょうがい者の能力を健常者と同等に捉える傾向があるということになる。そして、しょうがい者の困窮への手助けを行わない可能性につながる。ここには否定的な自己像を捉え、内省を深めることの難しさ、意識的な葛藤の持ち難さを背景とする利己主義的な傾向（友尻、2011）が、「自己に対する劣等感・不信感」の低さとして現れていると推察される。つまり、しょうがい者への困窮的側面を感じ取ることが自身の葛藤につながるため、健常者と同等の力があるのに努力をしていない、と意識することでその葛藤を回避していると考えられる。

一方で、弱いながらも「しょうがい者への過少評価」は「他者からの受容・信頼感」と負の関係にあることも分かった。高井（2001）は「他者からの受容感」や「感謝・安らぎ感」を持つことができている人は、他者を理解し受容しようとする姿勢を持っていることを示している。この点から考えると、「他者からの受容・信頼感」が高い場合「しょうがい者への過少評価」を行わず、そこにはしょうがい者自身の能力を理解し受容しようとしていることが考えられる。

このように考えていくと、「しょうがい者の過少評価」を行わないことの背景には、「自分自身の劣等感・不信感」も影響し葛藤回避的にしょうがい者の能力を健常者と同等に捉えようとし、結果的には象徴的偏見といえるような考えが働いている場合と、「他者からの受容・信頼感」を持っていることによってしょうがい者自身の能力を理解し受容しようとする考えが働いている場合が推察される。

「しょうがい者への理解の無さ」には、「他者からの受容・信頼感」が弱い負の影響を与えていることが分かった。このことも先に述べたようにしょうがい者を理解し受容しようとしていることが考えられる。つまりは、しょうがい者の要求も彼ら、彼女らの状況を理解していこうという姿勢が現れているのだろう。

一方で、弱いながらも「しょうがい者への理解の無さ」は「他者に対する非受容性」と正の関係にあることも分かった。「他者に対する非受容性」は他者の考えや意見を受け入れずそれを否定するような思いをもつ程度をあらわしており、しょうがい者が不平を訴えたとしてもその意味を考えようとはしない傾向を示していると考えられる。

以上より、「他者からの受容・信頼感」を感じていることはしょうがい者への偏見意識を弱める影響因として働く可能性があり、「自己に対する劣等感・不信感」や「他者に対する非受容性」はしょうがい者への偏見意識を高める影響因として働く可能性が示唆された。偏見や差別、stigma に影響を与える因子としてこれまで接触体験、知識等が指摘されてきたが、今回別の因子の関連性を見出せた。ただし、本調査での検討においては相関分析・偏相関分析ならびに重回帰分析によるため因果関係への言及には限界がある。しかし本調査結果をもとに、個人が「他者からの受容・信頼感」を感じ

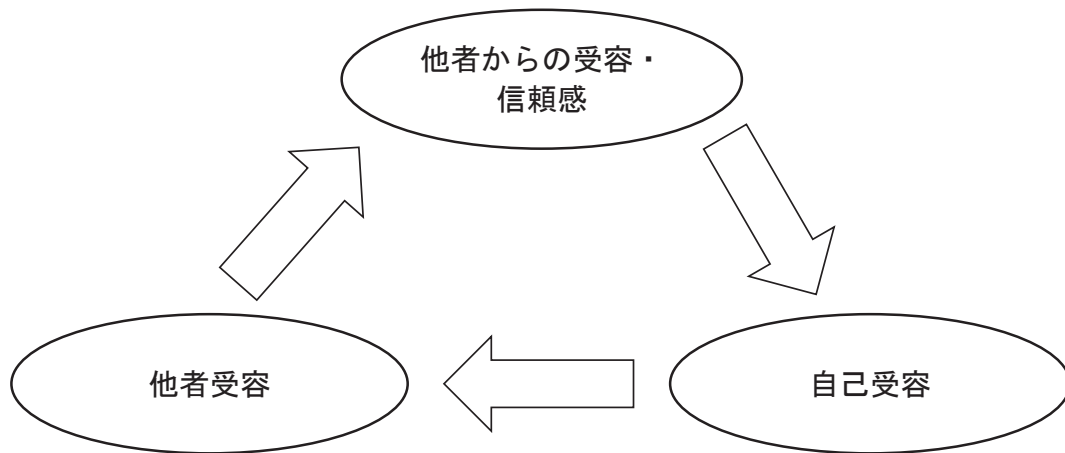


図1 「他者からの受容・信頼感」・「自己受容」・「他者受容」の連鎖

られるような教育を実施することができれば、個人の自己を受容する心が育ちそれが他者の受容につながり、受容された他者が自己の「他者からの受容・信頼感」が育っていくという連鎖が生まれ（図1）、偏見や差別、stigmaの解消につながっていくものと考ええる。

今後、「他者からの受容・信頼感」、「自己受容」、「他者受容」の連鎖を生み出すような偏見や差別、stigmaに関する人権教育を行うにあたっては「他者からの受容・信頼感」を得られていると感じられる、または「自己に対する劣等感・不信感」や「他者に対する非受容性」を弱められるような具体的かつ実証的な取り組みを考えることも有用になるだろう。

本論文は、2022年度龍谷大学宗教部人権問題プロジェクトでの研究の一部であり、また、2023年度日本心理臨床学会第42回大会にて『「受容する」、「受容されている」という感覚とstigmaの関係』（発表者 小正浩徳）として発表したものに加筆修正を行って作成された。

文献

- 浅井暢子（2018）偏見の低減と解消 北村英哉・唐澤穰（編）偏見や差別はなぜ起こる？ ちとせプレス pp.73-93
- Goffman,E.（1963）Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. 石黒 毅（2012）スティグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ 改訂版 せりか書房
- 原田宗忠（2015）短縮版自己評価感情尺度の作成 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要 5 pp.1-10
- 池上知子（2014）差別・偏見研究の変遷と新たな展開：悲観論から楽観論へ 教育心理学年報 53 pp.133-146
- 小正浩徳、滋野井一博、友久久雄（2021）対人援助職養成を踏まえた「死」を考える講義Ⅲ：学生自身が感じた変化に着目する 日本心理臨床学会第40回大会 発表論文集 p.281

- 熊田岐子、岡村季光、オチャンテ・カルロス（2019）英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査：学生の内的要因に着目して 奈良学園大学紀要 10 pp.55-61
- 文部科学省（2008）人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/024/report/attach/1370701.htm（2023.11.20閲覧）
- 大江朋子（2018）ステレオタイプと社会的アイデンティティ 北村英哉・唐澤穰（編）偏見や差別はなぜ起こる？ ちとせプレス pp.3-19
- 内閣府（2019）令和元年版障害者白書 <https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r01hakusho/zenbun/index-pdf.html>（2023.11.20閲覧）
- 内閣府（2022）人権擁護に関する世論調査 <https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-jinken/2.html>（2023.11.20閲覧）
- Ojio,Y., Yamaguchi,S., Ohta,K., Ando,S., Koike,S. (2019) Effects of biomedical messages and expert-recommended messages on reducing mental health-related stigma: a randomised controlled trial. *Epidemiology and Psychiatric Sciences* 29 DOI : 10.1017/S2045796019000714
- 清水佑輔、ターン有加里ジェシカ、橋本剛明、唐沢かおり（2022）象徴的障害者偏見尺度日本語版（SAS-J）の作成 心理学研究 92（6） pp.532-542
- Sue,D.W. (2010) *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. John Wiley & Sons Inc. マイクロアグレッション研究会訳（2020）日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別 明石書店
- 高井範子（2001）他者からの受容感と生き方態度に関する研究：存在受容感尺度による検討 大阪大学教育学年報 6 pp.245-254
- 友尻奈緒美（2011）劣等感とその補償について：質問紙と TAT を用いた調査より 京都大学大学院教育学研究科紀要 57 pp.211-224
- 鳥居深雪、梅田真理、染木史緒、近藤武夫、小川修史、式部陽子、西尾祐美子（2021）発達障害に対する高校生のスティグマの実態とオンラインによる障害理解教育の有効性 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 14（2） pp.69-77
- 上田吉一、河野憲一（1993）異文化間コミュニケーションと自己実現に関する一考察：B 価値指向態度について 人間性心理学研究 11（1） pp.68-82
- 上村有平（2007）青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会志向性を指標として 発達心理学研究 18（2） pp.132-138
- 吉田昭久、沢野有香、服部智（1992）自己受容の基底因Ⅵ：Berger's scale の再検討 茨城大学教育学部紀要（教育科学）（41） pp.289-308

受付日：2023年11月24日

受理日：2023年12月27日